Osaka Metropolitan University

OMU Students 海外留学レポート

留学最終日の Farewell Party にて。左端がレポート提出者。

氏名　白数　夏生
所属　工学研究科　都市系専攻
学年　D2 年

留学先　短期留学（ソウル市立大学）
留学期間　2025/2/5~2025/2/20

留学レポート Study Abroad Report

目次

1 プログラムの概要と生活について
2 授業・文化体験について
3 韓国語の授業について
4 自身の研究について
5 まとめ

1 プログラムの概要と生活について

小生が参加した、2025 Seoul International Winter School について報告する。本プログラムでは、16 日間の語学留学という形を基本としつつ、様々な授業や体験を通じて韓国のポップカルチャーや食事、経済といった現代文化全般を学ぶことができた。授業は最近の韓国文化について学ぶクラス(平日午前)と韓国語講座(平日午後)から構成され、それに加えて 4 つの文化体験の機会が織り込まれていた。また放課後や土日には自由時間が設定され、ソウル市立大学の学生が PA に付き、他大学からの参加者を加えた 3 名(以後、PA 学生ら)でソウルの街を巡ることができた。本プログラムには 5 か国から 38 名の学生が参加しており、海外の同世代と親しくなる貴重な機会であっただけではなく、英語でのコミュニケーション能力も大きく向上した。以下にプログラム期間中の日程を示す。

5 日（水）出国、大学内の International Domitry にチェックイン、不足のアメニティなどを買い揃える。
6 日（木）授業①(午前+午後)：K-Webtoon+韓国語講座(初級)、Welcome Party、PA らとカフェへ
7 日（金）授業②：K-pop①+韓国語講座、PA らと龍山へ
8 日（土）午前：研究のため個人で龍山へ。午後：PA らと合流し安国や北村をまちあるき
9 日（日）研究のため、韓国の研究者に会いに個人で水原市へ。
10 日(月) 授業③：K-pop②+韓国語講座
11 日(火) 体験①：螺鈿漆器体験+K-pop Dance Lesson
12 日(水) 授業④：K-economy+韓国語講座
13 日(木) 体験②：K-temple food 教室+韓服で景福宮へ。
14 日(金) 授業⑤：K-economy +韓国語講座
15 日(土) PA らと聖水や江南のカフェ、トレンドのストリート、公園などをまちあるき

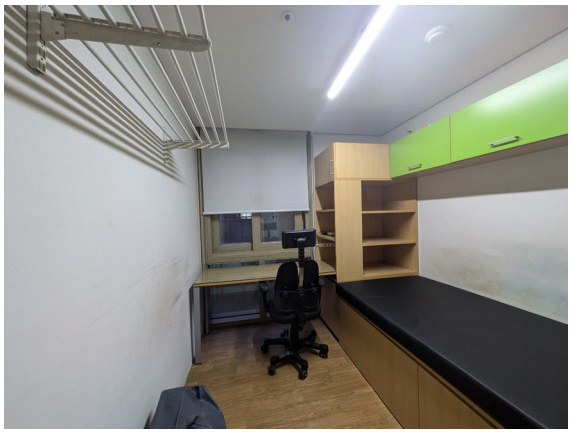
16 日(日) 終日研究の作業
17 日(月) 授業⑥：K-entertainment+韓国語講座
18 日(火) 授業⑦：K-World Heritage+韓国語講座
19 日(水) 授業⑧：K-café+韓国語講座、Farewell Party、PA らとカフェへ
20 日(木) International Domitry をチェックアウト、帰国。

大学での日常生活について、宿泊先は大学内の International Domitory であった。室環境は良好で、床暖房があり、氷点下の日々でも健康に問題はなかった。机と椅子、Wi-Fi、収納とベッドが完備され、トイレやシャワー、水栓は 2~3 の個人室と共用である。洗濯室やジムは全室で共用で、その他寮内にコンビニと食堂が存在し、事実上 24 時間使用可能で、学生生活には十分な環境であった。ただし、アメニティ類は用意されておらず、歯ブラシやシャンプー、石鹸、バスタオル、ゴミ袋はもちろん、トイレットペーパーや寝具も自分で持ち込むか、購入する必要があった。寝具については、大学からレンタルサービスの紹介がなされた。

食事は、Welcome Party と Farewell Party の夕食、体験②の昼食を除いて用意はないため、自身で購入するか共用食堂で料理を行う。お土産を除けば、滞在費用の多くは食費に割り当てることになった。また韓国では食事の 9 割が辛いため、辛い物が苦手な人は覚悟が必要だと感じた。

会話は、授業でも日常生活でも、基本的に英語で行うことができた。タクシーやバスの運転手さんには英語が通じないことも多いが、google 翻訳を使用するためコミュニケーションに不自由を感じることはなかった。寮内では、本プログラム参加者以外にも多くの外国人宿泊者が生活していた。

2 月の寒さについては、16 日間を通じてほとんど氷点下の日々であったが、基本的な防寒着やカイロなどを持参しておけば、乗り越えることは可能だと感じた。ただし、日によっては油断して手袋やマフラー無しで外に出ると、冷たい風によって 5 分で手先や耳先の感覚が無くなり、鼻で呼吸ができなくなったため、快晴の日であっても防寒を完璧にしておく必要があった。



宿泊室の入室時の様子

次にプログラムで学んだ点や感じたことを報告するが、今回のプログラム参加は、小生の研究に関係した現地の研究者訪問も大きな目的に含んでおり、この訪問についても報告に加える。

2 授業・文化体験について

授業については、平日の午前中に、韓国のポップカルチャーや経済、芸能、文化遺産等に関する講義が行われ、加えて 4 つの文化体験(螺鈿漆器体験、K-pop dance lesson、韓国料理体験、韓服体験)が用意されていた。

これら講座を受講して印象的だった点は、韓国の現代史において、朝鮮戦争(韓国戦争)、漢江の奇跡(1960 年代から 80 年代にかけての急速な経済成長)、民主化(1987)については必ず言及があるという点だ(授業①～⑥)。もちろん、日帝期や米軍についても言及はなされるが、第二次大戦後の状況の中で、現在の韓国文化がいかに生じてきたかという認識が、韓国現代史を形成しているように感じた(もちろん、授業時間が限られていたり、日本人学生が多かったことの影響はあるだろうが)。

現在、韓国文化は多岐にわたる。多くは Kpop という言葉で代弁されるが、その中には韓国映画やドラマ、音楽、アイドル、Webtoon、アニメ、ゲームなどが含まれ、そこに韓国料理やカフェ、菓子、化粧品といったコンテンツも加わる(授業④)。これらは日本ではもちろん、今や世界中にファンを持つ一大エンターテインメント産業だ。さらに韓国は、モノづくりの国でもある。韓国内には世界的な自動車や家電、

エレクトロニクス、半導体、機械メーカーなどが一通り揃い、重要な輸出産業となっている(授業④⑤)。これ等の要素が一通り揃い、グローバルな事業を展開していることは、民主化がなされた時期が 1987 年であることを考えると、驚異的な速度でその市場を成立させたことを実感させる。

それらを生み出した背景として、アメリカによってポップカルチャーを受容する下地が作られていたこと、Jpop が隣接していたこと、にもかかわらず自国のみで消費文化事業の成長を成立させる人口に不足していたという、矛盾した状況を感じた(授業⑥)。その結果が、日本と比較して極めて早い期間で、観光や文化のソフトパワーを国の重要な産業と捉えることができた現状の成功だろう。

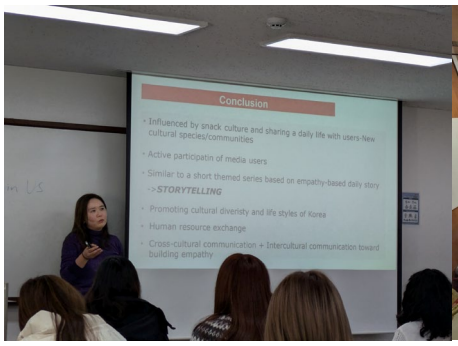
日本ではもともと、産業としてハードが重要視されてきた風土に加え、人口規模の大きさから自国で十分な消費が可能であったため、この問題を回避してきた。しかし、2 つの授業で言及のあった韓国経済 4 つの課題、すなわち原動力(growth engine)の搾取、地域格差、人口減少、地政学(国防)上の問題などは(授業④⑤)、日本も同様の課題に直面しており、昨今の人口減少の状況では、韓国のエンターテイメント産業と似た状況に陥るだろう。そんなときこそ、先の韓国に Jpop が隣接していたように、現在の日本には Kpop が隣接していることが大きなアドバンテージとなる。ここ数年の韓日関係はかなり良くなってきていると感じているが、東アジアを代表する 2 国として、互いに学び、不足を補い、成長していくことを、我々の世代の課題としたいと感じた。

3 韓国語の授業について

韓国語の授業については、参加者のレベルに合わせて 3 クラスが用意されており、小生は初級のクラスを選択した。時間は平日午後からの 4 時間で、全 8 日間にわたって行われた。全クラスを終えるころには、まだスピーキングやリスニングが可能なレベルでは無いにせよ(語彙が無いため)、ハングル文字の音については完全に読めるようになっており、多くの講座の中でも最も達成感や満足感を感じた講座だった。

初級クラスでは、まずハングルを覚え始めるところから授業がスタートした。日本の 50 音に似た仕組みがある上で、母音と子音の文字を組み合わせることで一文字で 2 音の発音が可能な、ひらがなと漢字の間のような性質を持った文字だと感じた。組み合わせによっては表音文字でもあるし、表意文字ともなりうる仕組みは、機能的で理解しやすかった。ただし、音の聴き分けには相当な訓練が必要そうだ。

授業は基本的に毎日あるため、早く文字を読めるよう、授業後の復習を必ず寮でするようにした。2 日目まではハングルの授業で、3 日目から It is ~や there is, 形容詞や動詞を使った構文の学習に広がっていった。授業はテキストに沿って行われた。会話練習などは参加学生同士でペアを組むため、基本的に会話も授業の進行も英語で行われる。少人数であるため、質問などもしやすい。最後の授業時には、学生同士は全員仲の良い関係となっていた。



平日の授業(午前)の様子

体験授業②の Korean Temple Food 体験の様子

テキストに沿って進む韓国語の授業(午後)

4 自身の研究について

最後に研究については、共通の研究テーマを持つ韓国側の第一線の研究者と親しい関係を築くことができ、大きな成果となった。

小生は、近代建築史分野の中でも特に旧日本軍の建築施設の研究を専門としている。旧日本軍は、日清戦争以降大陸にも幾つかの拠点を持つようになり、その跡地には現在も、日本時代の明治期の建造物が残されていることが多い。韓国においてはソウルの旧龍山基地がそれにあたり、戦後は米軍に接収された後、2023 年には韓国政府へ完全返還が完了している。その旧龍山基地内の施設について、米軍の移転が決定した 2018 年ごろから継続的に調査研究を行われているのが、今回訪問が叶った南龍協氏である。南先生は現在、韓国政府より旧基地内の調査業務を委託された ESO 建築士事務所付研究所所長であり、京畿大学建築学科兼任教授としても、基地施設の調査研究に当たられている。

訪問は、2 月 9 日(日)の自由時間を利用して実施し、先生のオフィスがある水原市へ向かった。なお前日と前々日には、事前調査として龍山や龍山基地周辺の探索した。旧日本軍の建築物のみを専門とする研究者は韓日ともに少なく、互いの研究情報をかなり専門的な内容にわたって交換することができた。旧龍山基地については、現在も現役の軍事施設であるため、基本的に調査資料はすべて韓国政府の国家機密に指定されている。そういった資料を、南先生からは閲覧に限って共有して頂き、公開情報については多くの元データを提供して頂いた。

昼食時には、SOE 建築設計事務所所長の金さんから焼き肉をご馳走頂き、研究者としての将来の進路などについても相談に乗って頂いた。帰国後には、こちらからも研究資料の共有を行っている。

右奥が南先生、左が金所長

5 まとめ

本プログラムへの参加を通じて、韓国という隣国をより身近に感じることができ、また英語でのコミュニケーションにも自信を持てるようになった。

授業では、韓日で共通した様々な文化や政治的、経済的問題があることを知り、東アジアにとって両国の協力が大きな恩恵をもたらすのではないかと、改めて考えるきっかけとなった。またハングルを読むことができるようになり、韓国語への親しみやすさが大きく増した。

加えて授業外の PA らとの自由行動では、まちあるきなどを通じて現在進行中の韓国のトレンドを知ることができ、なぜそのような流行が起きているのかという背景についても体感することができた。またこのときメンバーとはとても親しい関係となり、今後も交流を継続させたい。

最後に研究について、今回、韓国側で共通の研究テーマを扱う研究者と知り合えたことは、非常に大きな成果となった。それは、研究情報の共有という点以上に、韓国と日本の間で、「旧日本軍の建築物」というセンシティブな問題を含んだテーマについて、今後の両国にとって必要不可欠な課題を含んでいるという認識が前提の下、同じ目標を確認できた点にある。今回の訪韓は、今後も本テーマで研究を進めていく上で大きな励みになると同時に、数少ない本分野での先輩に出会うものとなった。

本プログラムに参加できたことを、関係者の皆様に感謝申し上げます。 (2025/3/1)

空き時間を利用して研究関係の建築物を巡る。

休日には PA らとソウル市内を散策。

最終日に参加者全員のパスポートと記念撮影。